

大学体育授業における動機づけ雰囲気と主観的恩恵評価の関係 ：受講種目と性別の違いに着目して

中須賀巧¹⁾, 木内敦詞²⁾, 西田順一³⁾, 橋本公雄⁴⁾

The relationship of motivational climates and perceived benefits scale of physical education in university students: A focus on differences in sporting events and sex.

Takumi NAKASUGA¹⁾, Atsushi KIUCHI²⁾,
Junichi NISHIDA³⁾, Kimio HASHIMOTO⁴⁾

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationships among perceived motivational climates and perceived benefits scale of physical education in university students. Our basic study model was that the presence of 2 motivational climates (mastery climate and performance climate) would influence to promote perceived benefits of physical education. The sample comprised 1370 university students (mean age=19.0±0.6years) who were four-year universities and were taking physical education course. The measures used included a questionnaire on motivational climates in physical education (2 sub-scales: “mastery climate” and “performance climate”), and perceived benefits scale (5 sub-scales: “Acquisition of exercise skills and training methods”, “Understanding the importance of cooperative play and improvement in communication skills”, “Stress coping and arousal of positive feeling”, “Improvements in physical strength and physical activities,” and “Establishment of regular lifestyles”). The validity of this model was verified using structural equation modeling by every 4 groups (male-individual sporting events (n=408), female-individual sporting events (n=463), male-team sporting events (n=308), female-team sporting events (n=191)). The results of study suggested the following processes: (1) The mastery climate had a positive influence on perceived benefits of physical education. (2) The performance climate had a positive influence on “Improvements in physical strength and physical activities” and “Establishment of regular lifestyles”. (3) The performance climate had a positive influence on “Acquisition of exercise skills and training methods” (female-individual sporting events group and female-team sporting events group). (4) The performance climate had a negative influence on “Understanding the importance of cooperative play and improvement in communication skills” (male-team sporting events group and female-team sporting events group). (5) The performance climate had a negative influence on “Stress coping and arousal of positive feeling” (male-team sporting events group only). In conclusion, to enhance perceived benefits with physical education course, it is important for teachers to cultivate a mastery climate.

キーワード：体育，熟達雰囲気，成績雰囲気，主観的恩恵評価，大学生

Keywords：physical education, mastery climate, performance climate, perceived benefits scale, university students

はじめに

大学における保健体育科目は，生涯にわたるスポーツ習慣を形成・定着させる視点に立ってスポーツの意義や価値を体感する経験を豊かに積ませる場を提供しており，大学生の心身の健康問題に直接的・間接的に関わる学問領域として重要な役割を担ってきた（文部科学省保健体育審議会答申，1997）。また全国大学体育連合（2010）は，「体育系学術団体からの提言2010」の中で，大学における保健体育科目には身体的効果（体力向上，体脂肪率の減少など），

精神的効果（不安低減，ストレス解消など），社会的効果（コミュニケーションスキル向上，自己効力感の醸成など），そしてアクティブな日常生活の運動行動の促進効果（運動・スポーツ活動量の増加，生活習慣の改善など）といった4つの教育的効果があることを示している。さらに，各大学体育が掲げている理念や意義には，健康，体力，思考力，判断力，人間関係，生涯スポーツといったように共通するキーワードが含まれており（梶田ほか，2018；鍋倉ほか，2012；松田ほか，2012；千賀，2002），初等・中等教育課程のような学習指導要領は存在しないが，大学における保

1) 兵庫教育大学 Hyogo University of Teacher Education

2) 筑波大学 University of Tsukuba

3) 近畿大学 Kindai University

4) 熊本学園大学 Kumamoto Gakuen University

健体育授業はある程度共通の認識のもとで実施されてきたことが窺える。

しかし、1991年の大学設置基準の大綱化以降、保健体育科目の必要履修単位数の設定が廃止されたことにより、運動科学やその実践教育である保健体育科目は必修科目から選択科目へと各大学の裁量によって移行できる科目となっている。それを受け、体育施設の維持・管理に費やす予算削減、学習内容の不明瞭さ、初年次教育への代替えなどを理由に保健体育科目を廃止する大学も増加しており（梶田ほか、2018）、保健体育科目を履修しないまま大学4年間を過ごす学生も一部存在する。このように大学における保健体育科目の履修機会が減少することによって、運動・スポーツ実践者を育成することが困難になることに加え、中等教育段階からの教育内容を発展させ、多岐にわたる運動・スポーツ実践に伴う効果を体感させることも困難になる可能性がある（西田ほか、2016）。よって、心身の成長、健康の改善、体力の維持、そしてスポーツ文化の継承などの教育に貢献できる可能性がある運動・スポーツについて学ぶことができる保健体育科目を必修・選択の履修形態に拘らず大学に設置しておくことが重要であると言える。しかし、そういった重要性についての理解を得るために保健体育科目を担当する教員は、授業を通して運動・スポーツについて学生に何を学ばせたのか、またどういった効果に気づかせたのか、さらには、それらが何に活かせるのかなど具体的な学びや効果といった学修成果について常に示していく必要がある。このような学修成果を捉える一つの視点として、体育授業を受講した学生自身が運動・スポーツに対する意義や価値について授業を通じてどのように理解（知覚）できたのかといった主観的恩恵（perceived benefits）が注目されている（西田ほか、2015、2016）。これは体育授業を学修した結果として生じた学生自身の種々の学びや気づきといった有益性の知覚（Wilcox et al., 2006）と定義されており、またそれを定量的に捉えるための評価尺度の開発も進められている（清水ほか、2012；西田ほか、2015、2016）。例えば、清水ほか（2012）は、体育授業を受講した学修成果を測る特有の指標として大学生版授業用効用認知尺度を作成している。しかし、この尺度には、ストレス反応との関連要因として限られた効用についての認知的側面を捉えるものであったこと、過去の経験に基づいて効用認知を抽象的に尋ねるという項目を採用していることなどから限定された事象での活用に限るといった問題もあった。西田ほか（2015、2016）は、それらの問題を指摘し、包括的な観点から主観的恩恵について評価できる尺度を独自に開発している。具体的には、運動スキルの向上やそれを身につけるための練習方法の学びに関する内容で

ある「運動スキル・練習方法の習得」、他者と協力することの価値の認識および対人コミュニケーションスキルの発揮に関する内容である「協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上」、ストレス解消や快感情の向上に関する内容の「ストレス対処とポジティブ感情の喚起」、体力の維持・改善および運動機会の増加についての「体力・身体活動の増強」、そして規則的な生活習慣の意識である「規則的な生活習慣の確立」といった5つの下位尺度で構成されている。そして、この主観的恩恵を独立変数に、大学に対する適応状態（大学適応感）を従属変数とした関係について検討した結果、主観的恩恵を高く評価した学生は大学への適応感も高いという影響性があることが確認されている（西田ほか、2016）。また、水泳・水中運動に限定された研究（西田、2012）ではあるが、それらの活動を通して恩恵が得られたと高く評価している学生ほど、日常的な運動行動を促す意図も高い傾向にあると報告されている。このように、大学体育授業において学生の主観的恩恵を高めることは、学生個人とその学生が在学する大学環境との適応状態を良好にする可能性があり、また大学体育が掲げる目標の1つでもある生涯にわたるスポーツ習慣の形成を促すうえでも欠くことができないと考えられる。

これまでに包括的な主観的恩恵を定量的に捉えた先行研究は、ほとんど確認されておらず、前述しているもの以外では見受けられない。またそれらの研究では、主観的恩恵が他の変数にもたらす影響性について検討されているものの、体育授業を通じてどのように主観的恩恵が高まるのか、その要因についてまでは言及されておらず、検討の余地が残る。例えば、体育授業場面には、指導に際する教員の価値観（努力や出来栄え）、評価基準（絶対的・相対的評価）、教員・受講者の志向（記録更新好みか競争好みあるいは仲間との関係重視）など教員あるいは受講者によってつくられる様相の異なる授業雰囲気が存在する。しかし、こういった学生の体育授業に対する雰囲気の捉え方と主観的恩恵との関係について調べられた研究は見当たらず、主観的恩恵を高める授業雰囲気づくりについて十分な知見を蓄積しているとは言えないのが現状である。

体育授業場面の動機づけ研究では、教員の指導法・評価基準や受講者の志向の違いといった集団が持つ目標を構造的に捉えて検討する際に有効となる概念として、動機づけ雰囲気が注目されている。これは、学習場面での重要な他者（教員や受講者など）によってつくられる環境の構造と言われており、能力に価値が置かれ競争を通しての達成が重視される成績雰囲気と、努力に価値が置かれ熟達に至る過程が重視される熟達雰囲気の2側面からなり（Ames, 1992；西田・小縣、2008；Roberts, 1992；Roberts and

Kristiansen, 2012), 体育学習場面における環境要因を検討できる概念として用いることができる(原・松田, 2008; 中須賀ほか, 2014; 中須賀ほか, 2017). 例えば, 原・松田(2008)は, 小学校体育授業における児童の動機づけ雰囲気認知と日常的な運動実施頻度との関係について検討しており, 熟達雰囲気を認知していることが活発な運動実施を促すことを示唆している. また中須賀ほか(2014)は, 中学生を対象に動機づけ雰囲気と体育に対する好意的態度との関係について検討した結果, 熟達雰囲気の認知が体育に対する好意的態度を高めることを明らかにしている. さらに, 高校生を対象に体育授業における動機づけ雰囲気と授業満足感との関係について検討した研究では, 成績雰囲気は授業満足感の低下要因となり, 一方熟達雰囲気は授業満足感の向上要因となることが確認されている(中須賀ほか, 2017). このように小学生, 中学生, そして高校生を中心に発展してきた体育授業場面における動機づけ雰囲気については, その捉え方によって, その後の行動, 認知, 感情に異なる影響をもたらすことが示唆されている. 大学生を対象とした体育授業の動機づけ雰囲気研究としては, 永田ほか(2015)が小・中学生版の体育授業における動機づけ雰囲気尺度(磯貝ほか, 2008)を大学生に対応させるため, 単語の一部修正(教師を教員にするなど)ならびに因子の再構成を行っている. その結果, 熟達および成績の両雰囲気によって構成されることが確認され, さらにそれら両雰囲気と動機づけ(内発的・外発的動機づけなど)との関連についても検討したところ, 熟達雰囲気が内発的動機づけを誘発し, 成績雰囲気が外発的動機づけを誘発することが明らかとなった. このように, 大学生を対象にした場合においても, 熟達・成績といった両雰囲気は確認されている. また中学生や高校生を対象にした先行研究(中須賀ほか2014, 2017)を鑑みると, それらの雰囲気をどのように認知しているのかによって, その後の行動, 認知, そして感情に異なる影響をもたらす可能性がある. つまり, 先述した大学体育授業における学生の主観的恩恵の捉え方にも異なる影響を与えるのではないかという仮説が想定できる. 大学体育授業における動機づけ雰囲気と主観的恩恵の関係について検討した研究は僅少であり, 検討の余地が残る. また, 初等・中等教育課程における動機づけ雰囲気研究に比べると, 大学体育授業に着目した動機づけ雰囲気研究は少なく, 大学体育授業の指導法や授業雰囲気づくりの発展に向け, 多くの知見を蓄積していく必要もある.

以上のことから, 本研究では体育授業における動機づけ雰囲気と主観的恩恵評価の関係について検討することを目的とする. なお, 動機づけ雰囲気の認知は男女によって異なること(中須賀ほか, 2017), 主観的恩恵評価の得点が

教材とする種目によって異なること(西田ほか, 2016)なども報告されていることから, 性別や受講種目の違いによる比較を行うこととする.

方法

調査対象者

関東, 関西, 中国, 九州地方にある4年制大学(国立4校, 公立2校, 私立4校)において, 開講されている体育授業を履修した1年生または2年生を対象に質問紙調査を実施した. このうち調査票の記入漏れが多かった者(基本的属性の未記入, 尺度項目が4つ以上の未記入)や欠席回数が極端に多い者(6回以上欠席)などは無効回答者として分析から除外し, また質問紙に含まれる無効回答が少数(尺度項目が3つ以内)の場合は欠損値処理を行い有効回答者に含め, 最終的に1370名を有効回答者として分析に用いた. 調査時期は2016年の2月上旬, 7月下旬の各大学の授業終盤であった. 履修形態には, 必修, 選択, 選択必修があった.

調査内容

1. 基本的属性

対象者の基本的属性として, 所属学部名, 性別, 年齢, 学年, 種目名, 授業の出席状況について尋ねた.

2. 体育授業における動機づけ雰囲気の測定

大学生版の体育授業における動機づけ雰囲気測定尺度(永田ほか, 2015)を使用した. この尺度は, 「熟達雰囲気」6項目と「成績雰囲気」6項目の2下位尺度, 合計12項目から構成されている. 「あなたが受講した体育授業についてたずねます.」という教示文の後に, 各質問項目について, どのくらい当てはまるのかを「全く当てはまらない」(1点)から「よく当てはまる」(5点)の5件法で回答を求めた. そして熟達雰囲気に該当する6項目の合計得点を熟達雰囲気得点, 成績雰囲気に該当する6項目の合計得点を成績雰囲気得点とした. 本尺度の信頼性と妥当性に関しては, 永田ほか(2015)によって確認されている.

3. 主観的恩恵評価の測定

西田ほか(2016)により作成された体育授業の主観的恩恵評価尺度を使用した. この尺度は「運動スキル・練習方法の習得(以下, 運動スキル)」6項目, 「協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上(以下, 協同プレー)」6項目, 「ストレス対処とポジティブ感情の喚起(以下, ストレス対処)」4項目, 「体力・身体活動の増強(以下, 体力・身体活動)」6項目, 「規則的な生活習慣の確立(以下, 規則的な生活)」3項目の5下位尺度, 合計25項目から構成されている. 「今期の体育実技授業を受講して, あなたがどのように感じたのか(考えたのか)を尋ねるものです.」とい

う教示文の後に、各質問項目について、どのくらい当てはまるのかを「全く当てはまらない」(1点)から「非常によく当てはまる」(7点)の7件法で回答を求めた。本尺度の信頼性と妥当性に関しては、西田ほか(2016)によって確認されている。

手続き

質問紙調査は、授業時間または授業終了後の時間を利用して著者および研究協力者により実施された。調査に先立ち、調査目的および調査内容を研究対象者に説明した。また、調査への協力は自由意思によること、回答の途中でいつでも中断できること、授業の成績評価とは無関係であること、そして匿名による回答であり統計的处理を行うため個人の結果として公表されないことをフェイスシートに記載し、さらに口頭でも説明を加えたうえで無記名形式の質問紙への回答を依頼した。対象者による質問紙への回答後、その場で回収した。

分析モデル

体育授業における動機づけ雰囲気研究(中須賀ほか, 2014; 2017)では、中学生や高校生を対象に、動機づけ雰囲気を独立変数に、様々な心理的変数(結果予期や授業満足感など)を従属変数に付置したモデルを設定し、その妥当性について検証が行われている。これらの研究はいずれも、体育の授業雰囲気を構造的に捉える一視点として動機づけ雰囲気の認知を始発点(独立変数)に置いたことで、こういった授業雰囲気づくりが心理的成長に有効的になるのかを明らかにしたうえで、さらに学校教育現場の実践を補填するような示唆を含めた考察をしている。したがって、本研究においても図1に示すとおり、大学体育授業における動機づけ雰囲気の熟達雰囲気・成績雰囲気をそれぞれ独立変数とし、学生の主観的恩恵の各下位尺度(「運動スキル」, 「協同プレー」, 「ストレス対処」, 「体力・身体活動」, 「規則的な生活習慣」)を従属変数とした分析モデルを設定した。これにより、大学体育における授業雰囲気が学生の主観的恩恵の向上(あるいは低下)に、どのような影響を与えているのか検討することができる。

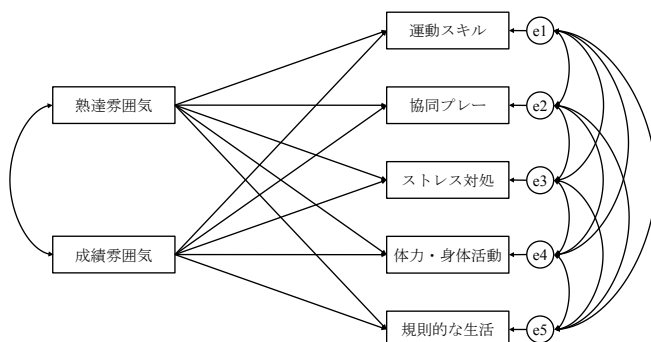


図 1. 分析モデル

統計解析

まず、各下位尺度の得点について、性別(男子, 女子)と経験種目(集団種目, 個人種目)による二元配置分散分析を実施し、交互作用が認められた場合は、単純主効果の検定を行った。次に、4つの群(男子集団種目, 男子個人種目, 女子集団種目, 女子個人種目)ごとに相関係数を算出した。また、上記群におけるモデル内の変数間の関連性を共分散構造分析により検討を行った。モデル採択はGFI (Goodness of Fit Index), AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index), CFI (Comparative Fit Index), RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation)の各適合度指標をもとに行うこととし、それらの判断基準はGFIおよびCFIは0.9以上, RMSEAは0.08以下, そしてAGFIはGFIとの差分が小さいこととした(室橋, 2003; 豊田ほか, 1992)。統計的有意水準5%のもと、分析には統計パッケージのIBM SPSS Statistics 23.0およびIBM SPSS Amos23.0を使用した。

結果

分析対象者の特徴および体育授業の履修状況

分析対象者(n=1370)の所属学部は理工学部(23.7%), 教育学部(20.3%), そして医学部(9.3%)と続き、その他に経済学部や福祉学部など19学部のいずれかに在籍しており、このうち1年生は1178名(86.0%), 2年生は192名(14.0%)であった。次に性別では男子が716名(52.3%), 女子が654名(47.7%)とそれほど大きな偏りは見られなかった。年齢は18歳から21歳の範囲にあり、平均年齢は19.0歳(SD=0.6)であった。続いて、対象者が履修した体育授業の種目はバドミントンが20.1%と最も多く、次いでテニス(15.3%), バスケットボール(12.5%), サッカー(9.9%)という順に多かった。他には卓球, ソフトボール, バレーボール, ゴルフなどの種目が見られた。また体育授業への出席状況は欠席なしと回答した者が54.5%, 1-3回の欠席者は42.8%, そして4回以上の欠席者数は2.7%であった。加えて、授業内容(種目)に基づくモデルの特徴を検討するため、西田ほか(2016)に倣い、種目の特性にて分類を行ったところ、個人種目(ジョギング, テニス, バドミントン, ゴルフ, 卓球, ニュースポーツ, フィットネストレーニング, 軽スポーツなど)は871名(63.6%:男子408名, 女子463名), 集団種目(バスケットボール, サッカー, バレーボール, ソフトボール, フットサルなど)は499名(36.4%:男子308名, 女子191名)であった。

基本統計量

性別および受講種目の違い(個人種目・集団種目)による動機づけ雰囲気と主観的恩恵の差異を検討するため、体

表 1. 体育実技の動機づけ雰囲気尺度と主観的恩恵評価尺度における性・種目間の二要因分散分析結果

	個人種目群				集団種目群				F 値		
	男子(n=408)		女子(n=463)		男子(n=308)		女子(n=191)		種目 個人・集団	性別 男子・女子	交互作用
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差			
動機づけ雰囲気											
熟達雰囲気	21.23	3.81	22.39	3.85	21.73	3.57	22.55	3.86	2.37	21.00 *	0.61
成績雰囲気	12.38	4.49	10.27	3.78	13.14	4.81	11.81	4.11	21.86 *	49.05 *	2.50
主観的恩恵											
運動スキル	29.78	5.93	28.37	5.90	29.07	6.10	26.71	6.33	11.88 *	30.11 *	1.89
協同プレー	29.98	5.88	30.81	5.87	31.49	5.42	31.69	5.57	13.20 *	2.48	0.96
ストレス対処	20.78	4.35	20.40	4.52	20.84	4.35	19.40	5.35	3.24	12.06 *	4.14 *
体力・身体活動	26.26	6.53	25.37	6.19	27.56	5.91	24.80	6.64	1.00	25.68 *	6.72 *
規則的な生活	12.36	3.79	12.37	3.62	13.03	3.55	11.76	3.91	0.02	8.85 *	8.98 *

* $p<.05$

育授業における動機づけ雰囲気測定尺度ならびに主観的恩恵評価尺度の各下位尺度得点を従属変数とし、性別(男子・女子)と種目(個人種目・集団種目)を独立変数とした二元配置分散分析を行った(表1)。まず動機づけ雰囲気尺度の「熟達雰囲気」得点ならびに「成績雰囲気」得点は、性別と種目の有意な交互作用は認められなかった。次に主観的恩恵評価尺度の「ストレス対処」得点($F(1, 1366) = 4.14, p<.05$)、「体力・身体活動」得点($F(1, 1366) = 6.72, p<.05$)、そして「規則的な生活」得点($F(1, 1366) = 8.98, p<.05$)は、性別と種目の有意な交互作用が認められた。そこで性別と種目それぞれにて単純主効果の検定を行った。その結果、「ストレス対処」得点については、男子は種目間に有意差は認められなかったが、女子の得点には種目間に有意差が認められた($F(1, 1366) = 6.51, p<.05$)。さらに個人種目受講群には、性別に有意差が認められなかったが、集団種目受講群には性別による

有意差が認められた($F(1, 1366) = 11.71, p<.05$)。「体力・身体活動」得点については、男子は種目間に有意差が認められた($F(1, 1366) = 7.42, p<.05$)が、女子の得点には種目間に有意差は認められなかった。また個人種目受講群($F(1, 1366) = 4.35, p<.05$)および集団種目受講群($F(1, 1366) = 22.64, p<.05$)のどちらにも性別による有意差が認められた。「規則的な生活」得点については、男子は種目間に有意差が認められた($F(1, 1366) = 5.65, p<.05$)が、女子の得点には種目間に有意差は認められなかった。個人種目受講群には、性別に有意差が認められなかったが、集団種目受講群には性別による有意差が認められた($F(1, 1366) = 13.76, p<.05$)。

以下、種目、性別を独立変数とした場合の有意な主効果について述べる。まず「成績雰囲気」得点と「運動スキル」得点には種目および性別による主効果が認められた。次に「熟達雰囲気」得点には性別による有意な主効果が、「協同プレー」得点には種目による有意な主効果がそれぞれ認められた。

続いて、動機づけ雰囲気と主観的恩恵の各下位尺度間の相関係数を群ごとに算出した(表2)。その結果、すべての群において、「熟達雰囲気」と主観的恩恵の各下位尺度との間に有意な正の相関係数が認められた。一方、「成績雰囲気」と主観的恩恵の各下位尺度との関係については、群によって若干異なることが確認された。例えば、「成績雰囲気」と「協同プレー」との間に有意な負の相関が認められた。また「成績雰囲気」は、「運動スキル」(男子・個人種目群のみ)、「ストレス対処」(男子・個人種目受講群、男子・集団種目受

表 2. 体育実技の動機づけ雰囲気尺度と主観的恩恵評価尺度の相関分析結果

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
① 熟達雰囲気	男子・個人種目群							
	女子・個人種目群	-						
	男子・集団種目群							
	女子・集団種目群							
② 成績雰囲気	男子・個人種目群	-.15 *						
	女子・個人種目群	-.21 *	-					
	男子・集団種目群	-.19 *						
	女子・集団種目群	-.39 *						
③ 運動スキル	男子・個人種目群	.50 *	-.12 *					
	女子・個人種目群	.47 *	.02					
	男子・集団種目群	.52 *	-.02	-				
	女子・集団種目群	.52 *	-.06					
④ 協同プレー	男子・個人種目群	.64 *	-.13 *	.64 *				
	女子・個人種目群	.63 *	-.12 *	.65 *				
	男子・集団種目群	.66 *	-.25 *	.61 *	-			
	女子・集団種目群	.67 *	-.37 *	.65 *				
⑤ ストレス対処	男子・個人種目群	.49 *	-.15 *	.65 *	.64 *			
	女子・個人種目群	.64 *	-.08	.66 *	.60 *			
	男子・集団種目群	.49 *	-.21 *	.58 *	.66 *	-		
	女子・集団種目群	.51 *	-.19 *	.79 *	.70 *			
⑥ 体力・身体活動	男子・個人種目群	.57 *	.05	.64 *	.61 *	.60 *		
	女子・個人種目群	.39 *	.06	.64 *	.56 *	.65 *		
	男子・集団種目群	.47 *	.12 *	.68 *	.54 *	.65 *	-	
	女子・集団種目群	.45 *	-.02	.75 *	.59 *	.81 *		
⑦ 規則的な生活	男子・個人種目群	.46 *	.15 *	.49 *	.45 *	.39 *	.64 *	
	女子・個人種目群	.26 *	.12 *	.52 *	.39 *	.50 *	.67 *	
	男子・集団種目群	.35 *	.18 *	.52 *	.39 *	.28 *	.57 *	-
	女子・集団種目群	.34 *	.06	.69 *	.40 *	.61 *	.74 *	

* $p<.05$

講群, 女子・集団種目受講群にのみ)に有意な負の相関がみられ, さらに「体力・身体活動」(男子・集団種目受講群にのみ), 「規則的な生活」(男子・個人種目受講群, 女子・個人種目受講群, 男子・集団種目受講群にのみ)に有意な正の相関が認められた。なお, すべての群において, 熟達雰囲気と成績雰囲気との間に有意な負の相関が認められ, 主観的恩恵の下位尺度同士には正の相関が認められた。

各モデルの適合度とパス係数について

先述したとおり, 本研究では性別と受講種目に基づき4つの群を設定した。続いて, それら4群の体育授業における動機づけ雰囲気が主観的恩恵に影響を与えるというモデルを検討するために, 群ごとに共分散構造分析を行った。共分散構造分析に用いた分析モデルは図1に示すとおり, 熟達雰囲気および成績雰囲気をそれぞれ独立変数とし, 学生の主観的恩恵の各下位尺度(「運動スキル」, 「協同プレー」, 「ストレス対処」, 「体力・身体活動」, 「規則的な生活習慣」)を従属変数とした。各群のモデル適合度ならびに有意なパス係数については, 男子・個人種目受講群($n=408$), 女子・個人種目受講群($n=463$), 男子・集団種目受講群($n=308$), 女子・集団種目受講群($n=191$)の順に述べる。なお, 各図に示すパス上の数値はすべて標準化係数(β 値)であり, 実線は有意な正のパス係数を, 破線は有意な負のパス係数をそれぞれ意味している。また図内の「 R^2 」は独立変数の従属変数に対する説明力を示す決定係数を意味している。

1. 男子・個人種目受講群 (図2)

まず, 男子の個人種目を受講した群($n=408$)を対象にモデルのデータへの適合度について検討を行った結果, 各適合度指標はGFI=.998, AGFI=.980, CFI=1.000, RMSEA=.009であり, すべての指標において基準を満たす値が得られたことからモデルの適合は良いと判断された。次に, モデル内の有意なパスについて確認すると, 熟達雰囲気は主観的恩恵のすべての下位尺度に有意な正のパスを示しており, 「協同プレー($\beta=.64$)」へのパス係数が

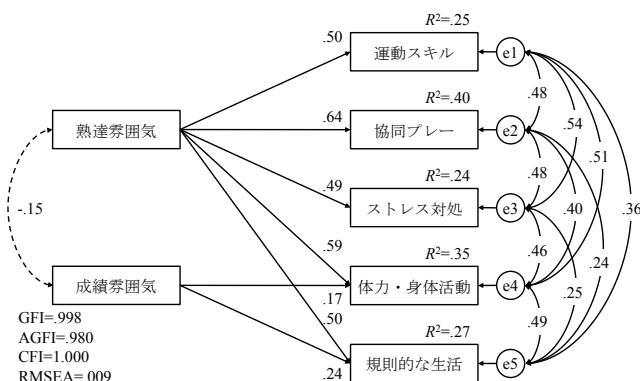


図2. 男子の個人種目受講群 ($n=408$) の共分散構造分析結果

最も高く, 続いて「体力・身体活動($\beta=.59$)」, 次に「規則的な生活($\beta=.50$)」, 「運動スキル($\beta=.50$)」, そして, 「ストレス対処($\beta=.49$)」の順であった。一方, 成績雰囲気は「規則的な生活($\beta=.24$)」と「体力・身体活動($\beta=.17$)」に有意な正のパスを示した。なお, R^2 の値はそれぞれ「運動スキル」が $R^2=.25$, 「協同プレー」が $R^2=.40$, 「ストレス対処」が $R^2=.24$, 「体力・身体活動」が $R^2=.35$, 「規則的な生活」が $R^2=.27$ であった。

2. 女子・個人種目受講群 (図3)

女子の個人種目受講群($n=463$)を対象に前述と同様の分析を行った結果, 各適合度指標はGFI=1.000, AGFI=.999, CFI=1.000, RMSEA=.000であり, すべての指標において基準を満たす値が得られたことからモデルの適合は良いと判断された。モデル内の有意なパスについて確認すると, 熟達雰囲気は主観的恩恵のすべての下位尺度に有意な正のパスを示しており, 「協同プレー($\beta=.63$)」へのパス係数が最も高く, 続いて「運動スキル($\beta=.49$)」, 次に「ストレス対処($\beta=.46$)」, 「体力・身体活動($\beta=.42$)」となり, そして「規則的な生活($\beta=.30$)」の順であった。一方, 成績雰囲気は「規則的な生活($\beta=.18$)」, 「体力・身体活動($\beta=.14$)」, そして「運動スキル($\beta=.12$)」に有意な正のパスを示した。なお, R^2 の値はそれぞれ「運動スキル」が $R^2=.23$, 「協同プレー」が $R^2=.40$, 「ストレス対処」が $R^2=.21$, 「体力・身体活動」が $R^2=.17$, 「規則的な生活」が $R^2=.10$ であった。

3. 男子・集団種目受講群 (図4)

男子の集団種目受講群($n=308$)を対象に前述と同様の分析を行った結果, 各適合度指標はGFI=.998, AGFI=.931, CFI=.998, RMSEA=.074であり, すべての指標において基準を満たす値が得られたことからモデルの適合は良いと判断された。モデル内の有意なパスについて確認すると, 熟達雰囲気は主観的恩恵のすべての下位尺度に有意な正のパスを示しており, 「協同プレー($\beta=.62$)」へのパス係数が最も高く, 続いて「運動スキル($\beta=.52$)」, 「体力・身

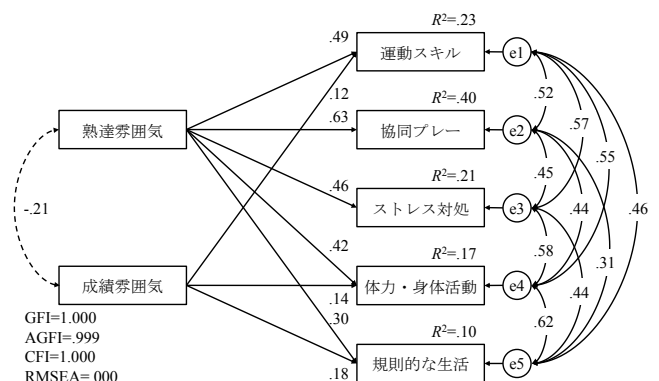


図3. 女子の個人種目受講群 ($n=463$) の共分散構造分析結果

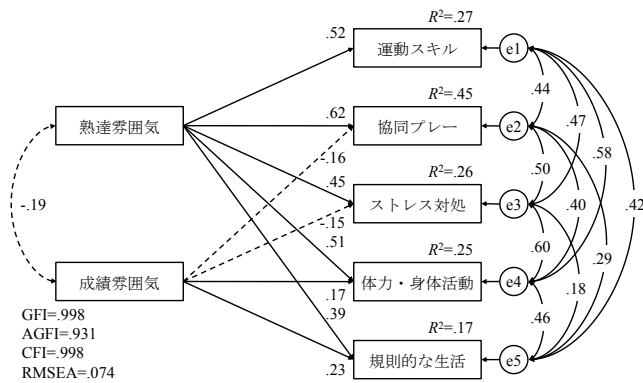


図 4. 男子の集団種目受講群 (n=308) の共分散構造分析結果

体力活動 ($\beta = .51$), 次に「ストレス対処 ($\beta = .45$)」となり, そして「規則的な生活 ($\beta = .39$)」の順であった。一方, 成績雰囲気は「規則的な生活 ($\beta = .23$)」と「体力・身体活動 ($\beta = .17$)」に有意な正のパスを示し, 「協同プレー ($\beta = .16$)」と「ストレス対処 ($\beta = .15$)」に有意な負のパスを示した。なお, R^2 の値はそれぞれ「運動スキル」が $R^2 = .27$, 「協同プレー」が $R^2 = .45$, 「ストレス対処」が $R^2 = .26$, 「体力・身体活動」が $R^2 = .25$, 「規則的な生活」が $R^2 = .17$ であった。

4. 女子・集団種目受講群 (図 5)

女子の集団種目受講群 (n=191) を対象に前述と同様の分析を行った結果, 各適合度指標は GFI=1.000, AGFI=.997, CFI=1.000, RMSEA=.000であり, すべての指標において基準を満たす値が得られたことからモデルの適合は良いと判断された。モデル内の有意なパスについて確認すると, 熟達雰囲気は主観的恩恵のすべての下位尺度に有意な正のパスを示しており, 「協同プレー ($\beta = .62$)」へのパス係数が最も高く, 続いて「運動スキル ($\beta = .59$)」, 「体力・身体活動 ($\beta = .52$)」, 次に「ストレス対処 ($\beta = .51$)」となり, そして「規則的な生活 ($\beta = .43$)」の順であった。一方, 成績雰囲気は「規則的な生活 ($\beta = .22$)」, 「体力・身体活動 ($\beta = .18$)」, そして「運動スキル ($\beta = .16$)」に有意な正のパスを示し, 「協同プレー ($\beta = -.13$)」に有意な負のパスを示した。なお, R^2 の値はそれぞれ「運動スキル」が $R^2 = .29$, 「協同プレー」が $R^2 = .46$, 「ストレス対処」が $R^2 = .26$, 「体力・身体活動」が $R^2 = .23$, 「規則的な生活」が $R^2 = .16$ であった。

考察

本研究では, 大学生の体育授業における動機づけ雰囲気の認知と主観的恩恵の認知との関係について, 性別および受講種目の違いに着目し検討を行った。具体的には, まず個人種目受講群の男子と女子, 集団種目受講群の男子と女

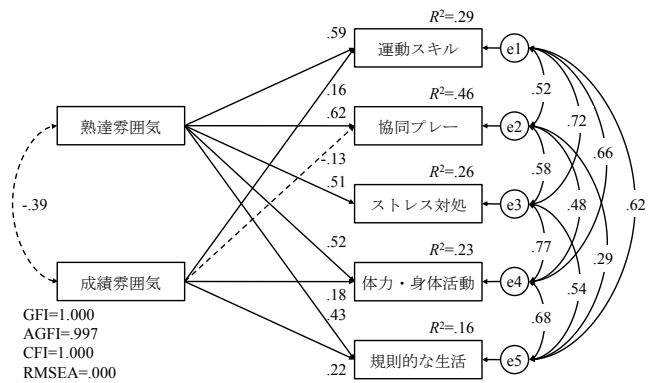


図 5. 女子の集団種目受講群 (n=191) の共分散構造分析結果

子の計4群を構成し, 次にそれら群ごとに体育授業における動機づけ雰囲気 (独立変数) から主観的恩恵 (従属変数) への影響について検証を行った。分析の結果に基づきながら, 本考察を以下のように整理することとした。まず, すべての群の共通点でもある「大学体育授業における熟達雰囲気の主観的恩恵への影響」について述べる。次に, 成績雰囲気は受講種目によって影響の仕方が異なることが確認されたため, 「個人種目受講者における成績雰囲気の認知が主観的恩恵に与える影響」, 「集団種目受講者における成績雰囲気の認知が主観的恩恵に与える影響」という視点から述べることとする。

大学体育授業における熟達雰囲気の主観的恩恵への影響

全ての群において熟達雰囲気の認知は, 学生の主観的恩恵評価の全ての下位尺度と有意な正のパスを示すことが確認された。これは個人または集団種目のどちらの受講においても熟達雰囲気を強く認知している学生ほど, 運動・スポーツに対する意義や価値について授業を通じてどのように理解 (知覚) できたのかといった主観的恩恵を高く評価することを示唆している。これまでにも体育授業において熟達雰囲気の認知が学習効果を高めることは中学生や高校生を対象にした先行研究で明らかにされているように, 大学体育授業でも熟達雰囲気の重要性を支持する結果となった。熟達雰囲気では, 仲間同士の協力・助け合い, 結果よりもそれに至るまでの努力や頑張りなどが大切にされている。このような熟達雰囲気を強調した体育授業では, 技能の上達が十分でなくても, 周囲から練習や努力する姿勢が称賛を受けるターゲットになり, また試合や練習で起こる失敗は個々の成長に必要な学習内容の一部として受け入れられると言われている (中須賀ほか, 2017)。つまり, 練習や努力をする姿勢そのものが高評価となり, 技能が上達する・しないに対して余計なプレッシャーや不安などを抱くことなく, 自己のペースで実技種目に専念できるのではないかと考えられる。そこでは, 技能レベルの高低 (あるいは上手・下手) に関わらず, すべての学生がある程度自

由に、かつ十分な時間、身体を動かすことができるため、これまでよりも体力が向上し、そして運動スキルも高まったと実感できるのではないかと推察される。また、たとえ試合(ゲーム)になっても相手を敵視する対象ではなく、切磋琢磨できる仲間として認識される可能性がある。さらに、楽しみながら実施する運動には、ストレスの低減効果や快感情を向上させる効果があることなどが複数報告されている(橋本ほか, 2000; 西田ほか, 2005)。先述しているように、熟達雰囲気強調された環境下では、余分なプレッシャーや不安を抱かずに楽しみながら運動を実施することができるため、気分のリフレッシュ効果や爽快感を味わうことができたという評価を高めるのではないかと考えられる。このように熟達雰囲気の授業には、気分・感情の改善効果、仲間と活動することの大切さの理解、体力の変化への気づきなどを促進するような効果が備わっていることが示唆された。そして、運動に伴う心身の健康を促す体験は、健康への意識も一層高め、規則的な生活習慣を目指そうと努力するのではないかと推察される。

大学体育授業における成績雰囲気が主観的恩恵に及ぼす正の影響

以下では成績雰囲気の認知が主観的恩恵に正の影響を示したパスについて考察を進める。

まず、すべての群に共通して、成績雰囲気から体力・身体活動および規則的な生活への有意な正のパスが確認された。これは、成績雰囲気を認知した学生ほど、体力・身体活動および規則的な生活への評価も高くなる傾向があることを示唆しており、受講した種目および性別を問わず学生全体に共通して確認された。体育授業における成績雰囲気では、教員は運動ができたかや記録が出せたかといった結果を重視し、学生同士も勝敗や記録において仲間よりも勝することに重点が置かれるようになるため、失敗することや下手なことは恥として認識される傾向がある(中須賀ほか, 2017)。また競争に負けた、挑戦に失敗した、記録が停滞したといった姿が周囲に知られることは、他者よりも技能(能力)が劣ることを証明することになる(中須賀ほか, 2018)。ただし、授業での競い合いや記録を重視するような能力評価は、運動に対して自信を持つ学生にとっての動機づけとなり、行動(授業内・外の運動活動)を促進させると言われている(Dweck, 1986; 磯貝, 2012)。つまり、学生は失敗するところは見られたくないし、いい結果(記録)を出さないと好成績がもらえないという状況に置かれる。そのような状況下において、他者よりも良い成績を取るためや、勝利を味わうために挑戦しようとする学生は、目標達成に向けて鍛錬を重ね、その過程で体力が必要なことを実感するのではないかと推察される。また授業内

で他者よりも優れた技能を発揮するためには、日頃からコンディショニングを整えておく必要がある。競い合うことを楽しむために学生は、他者の目に触れない努力として、日頃の食事や睡眠など規則的な生活を心掛けようとする意識が高まるのではないかと考えられる。

次に、受講種目を問わず女子学生にのみ共通して、成績雰囲気から運動スキルへの有意な正のパスが確認された。これは、個人種目であっても、集団種目であっても、成績雰囲気を強く認知した場合、自身の運動スキルが向上したと捉え、さらに効果的な練習方法についても理解し、スキルがどのように習得されるのか、そのコツを掴むことができたなどの学びを深める可能性があることを示唆している。女子学生の特徴として、そもそも運動はレクリエーション活動であり、そこで友達づくりを楽しむものとする傾向(徳永・橋本, 1980)がある。こういった傾向の背景には、これまでの体育授業の場で競争を楽しむといった経験が男子学生に比べ浅かった、あるいは経験はあったが楽しみ方がわからなかった、また、なかには競争そのものを回避してきたなどがあると思われる。つまり、運動技能水準における個人差(もともと運動が得意か否か、できるかできないかなど)にも寄るが、女子学生が好記録や勝利などの結果を目指して競い合う活動に楽しさを発見し、その楽しさを維持させるには運動技能(スキル)を上達させていくことも大切だと実感するのではないかと考えられる。

大学体育授業における成績雰囲気が主観的恩恵に及ぼす負の影響

前述のように、体育授業における成績雰囲気には、主観的恩恵を部分的に高める側面もあるが、熟達雰囲気が強調されている雰囲気とは異なり、負の影響を示すパスも確認された。

具体的には、集団種目受講者の男子・女子に共通して、成績雰囲気から協同プレーへの有意な負のパスが確認された。これは、集団種目の受講者で成績雰囲気を認知している学生ほど、協同プレーに対する理解やコミュニケーションの重要性に気づかないことを示唆している。本来、集団種目では、仲間と協力し合うことや互いにアドバイスを出し合うことをとおしてチームの勝利あるいは成功を目指すことが予想される。しかし、成績雰囲気が強調された授業雰囲気の場合、自己が目立つこと、そして勝つことが目標となり、万が一、技能レベルが劣る者がいた場合はチームの足を引っ張る邪魔な存在として評価されてしまうのではないかと推察される。そのため、チーム内で互いに技能を高め合おうとするのではなく、目先の勝利が有能である自己を証明することになることから、助け合うことや上手い下手に関わらずいろんな人と関わることなどの大切さにつ

いては理解されず、またその価値にも気づかないのではないかと考えられる。

そして、集団種目受講者群の男子にのみ、成績雰囲気の認知からストレス対処に負のパスを示すことが確認された。これは、集団種目受講者のうち特に男子学生において、成績雰囲気が強く認知されていた場合、運動によるストレスの軽減効果は表出されず、むしろストレス度が上昇し、爽快感、ワクワク感を低下させる可能性があることを示唆している。

男子学生は女子学生よりも積極的に競争に取り組む(長澤, 2000)と言われている。その点からみて、成績雰囲気が強調された場合、試合(ゲーム)や競争に負けることやチャレンジの失敗は低能力を意味するため、対戦チームには負けたくない、どちらの方が強いのか証明したいなどの競争心が芽生えるのではないかと考えられる。しかし、そこで集団種目(特に球技種目)に自信がない者にとっては、できないことがプレッシャーとなり、周囲からの視線がストレスとなる可能性がある。また、小畑(2018)は、体育授業の中で運動に対して自信がある生徒も、運動ができるが故に、消極的に参加する者の姿が不真面目な取り組みと理解し、ストレスを高める傾向があるとまとめている。

つまり、一生懸命、苦手な運動に取り組んでいても、それが消極的と判断されれば、そのメンバーがいる限りチームが勝てない、強さを証明できないとなり、成績雰囲気で強調される他者よりも高記録であることや勝利することなどの授業内目標が達成できず、仲間に対する怒りや不満などが上昇することになると考えられる。先に述べた、互いにコミュニケーションがとれておらず、仲間を理解できていないことと連動している可能性がある。個人種目において、成績雰囲気から主観的恩恵に負のパスが示されなかった背景として、集団種目ほど他者の技能が自己の成績や記録、結果にそれほど影響しないためと考えられる。また、このような結果が同じ集団種目受講者でも女子学生に認められなかった背景として、そもそも女子学生は仲間の運動している姿を見て応援したり、観戦したりすることを求める傾向にある(徳永・橋本, 1980)ため、試合(ゲーム)の結果や記録に感情が左右されることなく、実技に取り組めるのではないかと考えられる。

本研究のまとめと今後の課題

最後に本研究の結果をまとめ、それらを踏まえ、今後の検討課題について述べる。

本研究では大学生を対象に体育授業における動機づけ雰囲気の認知と主観的恩恵の関係についてモデルを設定し、さらに性別と受講種目による4つの群(男子・個人種目受講群、女子・個人種目受講群、男子・集団種目受講群、女

子集団種目受講群)を構成し、それら群ごとにモデルの検証を進めた。その結果、熟達雰囲気から主観的恩恵への影響については、どの群においても熟達雰囲気から主観的恩恵の全ての下位尺度に正のパスを示すことが確認され、群に大きな違いは認められなかった。本研究で用いた主観的恩恵評価尺度(西田ほか, 2016)は、冒頭でも示している大学体育授業の4つの教育的効果(身体的効果、精神的効果、社会的効果、運動行動の促進効果)を意図して構成されているものである。つまり、熟達雰囲気を強調するような授業雰囲気づくりは、これらの教育的効果を総合的に高めるのに有効的であることが示唆された。一方で、成績雰囲気に関しては、男女ならびに受講種目によって一部モデル内に異なる特徴があることが確認された。具体的には、①すべての群に共通して、成績雰囲気から体力・身体活動および規則的な生活への有意な正のパスが確認されたこと、②女子学生にのみ共通して、成績雰囲気から運動スキルへの有意な正のパスが確認されたこと、③集団種目受講者の男子・女子に共通して、成績雰囲気から協同プレーへの有意な負のパスが確認されたこと、④集団種目受講者群の男子にのみ、成績雰囲気の認知からストレス対処に負のパスを示すことが確認されたこと、の4点である。これらの結果は、必ずしも成績雰囲気を体育授業で強調することを支持するものではないが、一部学習成果を促す傾向が認められた点は、体育授業の中で扱うスポーツそのものが面白いというのではなく、周囲からどう見られるのか、他者よりも優れているところを認められたいなど、他者を一つの基準として自己の有能さを周囲に誇示しようとすることを目的とした、いわゆる外発的な動機づけが働き、体力や運動スキルを高めようとしたり、規則的な生活を送ろうとしたりする可能性を示唆している。したがって、成績雰囲気を認知するような体育授業には、身体的効果や運動行動の促進効果(女子学生のみ)を促進させるという肯定的側面がある一方で社会的効果や精神的効果は期待できないという問題も備わっていることが確認された。このことから、現段階では成績雰囲気づくりに慎重さが求められるのではないかと考えられる。

以上のことから、大学体育授業において、まずは熟達雰囲気づくりを心掛け、どのような恩恵を得ることができたのかを学生自身で実感することが必要である。そうすることで、将来的に運動やスポーツを実践することの意義について理解を深めていくことができるのではないかと考えられる。また運動に対する自信が高い受講生が集まるような授業(選択制のスポーツ実技系の授業など)で、なおかつ身体的効果や運動行動の促進効果を促すことが授業の到達目標であれば、成績雰囲気の授業づくりを取り入れてもいい

のかもしれない。ただし、ストレス対処や協同プレーに対して負の影響が確認されていることから精神的効果や社会的効果が促進されることは期待できないと言える。成績雰囲気を実践する際には、受講者の消極的な取り組み方は目立たないか、授業内でネガティブな発言が増加していないかなどに常に注意しておく必要があるだろう。

本研究の結果は、質問紙調査法に基づいて体育授業における動機づけ雰囲気と主観的恩恵評価の関係について言及したことに留まる。そのため、実践に向けた段階的な研究が今後必要になると言えるだろう。例えば、本研究は一時点で収集したデータを用いて行った横断的研究であるが、今後は、同対象者に対して複数回の調査(第1回目の授業と最終回の授業)を実施し、そこから因果(原因と結果)の推定を検討していく縦断的な研究を行うことが課題と言える。そして、実際に大学体育授業において様々な種目を対象にしながら、熟達雰囲気や成績雰囲気を強調した授業を展開することによって、学生の主観的恩恵に対する評価がどのように変動するのかといった点について研鑽を積むことが必要になるのではないかと考えられる。また複数の大学からデータを収集することによって、より一般的な大学生の傾向をモデルとして示すことができるが、その一方で、各大学の実態に着目することが困難になるという問題も生じる。例えば、対象となる科目が選択開講か、必修開講かによって、受講している学生の意識は若干異なる可能性もある。本来選択の科目であっても、取得する資格(教員免許状など)によっては必修となる科目もあり、同授業の中に、履修形態が選択の学生と必修の学生が混在していることも想定される。さらに大学によっては受講者の人数や物理的な場所(グラウンドや体育館など)に制限があり、選択と必修の学生を合同して授業を実施しなければならないといった事情もある。このように各大学で抱える問題なども考慮するとともに、選択、必修、選択必修といった履修形態という視点からの検討も今後必要になるのではないかと考えられる。何よりも、学生のニーズに合わせて多様化する近年の大学組織において、体育授業が学生にとって、どのような効果を備えているのかを様々な視点から検討していく必要があるのではないかと考える。

付記

本研究は、大学体育授業研究プロジェクト(University Physical Education Project: UPE project)として収集されたデータの一部を用いて行われた。また本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金(平成28-30年度 基盤研究(B)「行動理論に基づく大学生の自己成長を促す挑戦的課題達

成型授業の開発とモデル構築」課題番号:16H03227 研究代表者:橋本公雄)の助成を受けて行われた。

参考文献

- Ames, C. (1992) Achievement goals, motivational climate, and motivational processes. In: Roberts, G. C. (Ed.) *Motivation in Sport and Exercise*. Human Kinetics, pp. 161-176.
- Dweck, C. S. (1986) Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41 (10): 1040-1048.
- 原祐一・松田恵示 (2008) 小学校体育授業における「動機づけ雰囲気」への教師の働きかけに関する研究. 東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系, 60: 143-151.
- 橋本公雄・渡壁史子・西田順一 (2000) 運動に伴う一過性のポジティブな感情の増加とメンタルヘルスの改善・向上との関係. 体育・スポーツ教育研究, 1 (1): 5-12.
- 磯貝浩久・伊藤豊彦・西田保・佐々木万丈・杉山佳生・渋谷崇行 (2008) 体育における動機づけ雰囲気測定尺度作成の試み. 日本スポーツ心理学会第35回記念大会研究発表抄録: 194-195.
- 磯貝浩久 (2012) 達成目標理論—目標の性質とやる気—. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編, よくわかるスポーツ心理学. ミネルヴァ書房, pp. 80-83.
- 梶田和宏・木内敦詞・長谷川悦示・朴京眞・川戸湧也・中川昭 (2018) わが国の大学における教養体育の開講状況に関する悉皆調査研究. 体育学研究, 63 (2): 885-902.
- 文部科学省保健体育審議会 (1997) 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について(保健体育審議会答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314691.htm, (参照日 2019年3月22日).
- 松田裕雄・吉岡利貢・河村レイ子・桐生習作・金谷麻理子・武田丈太郎・門野 洋介 (2012) 大学体育の価値向上に向けた一考察—教育実践における目標・教授・学習に着目して—. 大学体育学, 9: 69-92.
- 室橋弘人 (2003) 分析のよさを評価する—適合度指標概論—. 豊田秀樹編, 共分散構造分析 疑問編. 朝倉書店, pp. 122-125.
- 鍋倉賢治・遠藤卓郎・大高敏弘・進藤正雄・嵯峨寿・松元剛・谷川聡・福田崇・吉岡利貢・武田丈太郎・村瀬陽介・山田永子・宮下憲 (2012) 我が国の「大学体育」の基本理念とカリキュラム. 大学体育研究, 34: 59-63.
- 永田直也・山内賢・佐々木玲子・加藤大仁・近藤明彦 (2015) 大学教養体育における運動・スポーツに対する動機づけと授業における動機づけ雰囲気の関係. 慶應義塾大学体育研究所紀要, 54 (1): 17-24.
- 長澤光雄 (2000) 大学生の体育における競争の認識に関する一考察. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 22: 31-39.
- 中須賀巧・須崎康臣・阪田俊輔・木村彩・杉山佳生 (2014) 動機づけ雰囲気および目標志向性が体育授業に対する好意的態度に与える影響. 体育学研究, 59 (1): 315-327.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2017) 高校体育における動機づけ雰囲気および目標志向性が生徒の体育授業満足感に与える影響. 体育学研究, 62 (1): 281-296.
- 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2018) 体育学習における動機づけ雰囲気, 目標志向性, 生きる力の因果関係の推定. 体育学研究, 63 (2): 623-639.
- 西田順一 (2012) 大学生の水泳・水中運動における意思決定バ

- ランスおよび主観的環境が行動意図に及ぼす影響—DBSSUの改訂を踏まえて—, 大学体育学, 9: 43-55.
- 西田順一・橋本公雄・柳敏晴・馬場亜紗子 (2005) 組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル—エンジョイメントを媒介とした検討—, 教育心理学研究, 53 (2): 196-208.
- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・谷本英彰・福地豊樹・上條隆・鬼澤陽子・中雄勇人・木山慶子・新井淑弘・小川正行 (2015) テキストマイニングによる大学体育授業の主観的恩恵の抽出: 性および運動・スポーツ習慣の差異による検討, 体育学研究, 60 (1): 27-39.
- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・堤俊彦・山本浩二・谷本英彰 (2016) 体育授業における大学生の主観的恩恵評価およびその大学適応感に及ぼす影響性, 体育学研究, 61 (2): 537-554.
- 西田保・小縣真二 (2008) スポーツにおける達成目標理論の展望, 総合保健体育科学, 31 (1): 5-12.
- 小畑治 (2018) 体育授業におけるストレスへのアプローチ, 体育科教育, 66 (2): 46-50.
- Roberts, G. C. (1992) Motivation in sport and Exercise: Conceptual constraints and convergence. In: Roberts, G. C. (Ed.) Motivation in Sport and Exercise. Human Kinetics, pp. 3-29.
- Roberts, G.C. and Kristiansen, E. (2012) Goal setting to enhance motivation in sport. In: Roberts, G. C. and Treasure, D. C. (Eds.) Advances in Motivation in Sport and Exercise, Third Edition. Human Kinetics, pp. 207-231.
- 千賀康利 (2002) 教養教育としての体育—運動生理学の立場から—, 大学創造, 12: 36-43.
- 清水安夫・上野雄己・雨宮怜・湯浅彩香・森 彩乃・加藤以澄・沢口 翠 (2012) 大学体育のストレスマネジメント効果に関する研究—体育授業の効用認知尺度とストレス反応尺度の開発による検討—, 神奈川県体育学会機関誌 体育研究, 45: 9-15.
- 徳永幹雄・橋本公雄 (1980) 体育授業の「運動の楽しさ」に関する因子分析的研究, 健康科学, 2: 75-90.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 (1992) 原因をさぐる統計学 共分散構造分析入門, 講談社, pp. 174-177.
- Wilcox, S., Ananian, C. D., Abbott, J., Vrazel, J., Ramsey, C., Sharpe, P. A., and Brady, T. (2006) Perceived exercise barriers, enablers, and benefits among exercising and nonexercising adults with arthritis: Results from a qualitative study. Arthritis & Rheumatism, 55: 616-627.
- 全国大学体育連合 (2010) 21 世紀の高等教育と保健体育・スポーツ (資料編). 全国大学体育連合: 東京, pp.32-37.

(2019年10月1日受付)
(2019年12月24日受理)

英文抄録の和訳

本研究の目的は体育授業における動機づけ雰囲気と主観的恩恵評価の関係について検討することであった。目的を遂行するにあたり、大学体育授業における動機づけ雰囲気の熟達雰囲気・成績雰囲気を独立変数とし、学生の主観的恩恵を従属変数に付置した分析モデルを設定した。4年制大学で体育授業を受講する学生1370名を対象に、質問紙調査を実施した。調査内容は体育授業における動機づけ雰囲気測定尺度と主観的恩恵評価尺度であった。分析には共分散構造分析を用いることとし、4つの群(男子・個人種目受講群, 女子・個人種目受講群, 男子・集団種目受講群, 女子集団種目受講群)ごとにモデルの妥当性の検証を進めた。本研究で得られた結果は以下のとおりである。(1) 熟達雰囲気から主観的恩恵への影響については、どの群においても熟達雰囲気から主観的恩恵の全ての下位尺度に正のパスを示すことが確認された。(2) すべての群に共通して、成績雰囲気から体力・身体活動および規則的な生活への有意な正のパスが確認された。(3) 女子学生にのみ共通して、成績雰囲気から運動スキルへの有意な正のパスが確認された。(4) 集団種目受講者の男子・女子に共通して、成績雰囲気から協同プレーへの有意な負のパスが確認された。(5) 集団種目受講者群の男子にのみ、成績雰囲気の認知からストレス対処に負のパスを示すことが確認された。以上のことから、大学生において熟達雰囲気を強調した体育授業が学修成果を高めるのに有効的になることが示唆された。